

1. 鎌倉時代にいた古志賀谷氏と大相模氏

加藤 幸一

① 古志賀谷（越ヶ谷）氏

元荒川には小高い土地（自然堤防）が川に沿ってみられる。そこは人々にとって住みやすい場所、古くから集落が発達し、周辺一帯を支配する豪族もいたと考えられる。それが古志賀谷氏である。古志賀谷氏は鎌倉時代にはここに館を築いて越ヶ谷郷（注1）を支配したに違いない。山崎善司氏によると次の通りである。

古志賀谷二郎為基が現在の岩槻区箕輪にいた箕勾氏から分かれて越ヶ谷郷に進出した。その館は、元荒川沿いのうち四町野（現・宮本町）の会田太郎兵衛の屋敷跡（現在の宮本町二丁目一八五番地、角栄団地）であったと推定している。「越ヶ谷」が古くは「古志賀谷」と書かれていた鎌倉時代のことである。

古志賀谷氏の館は四町野あたりにあったとの考えには全く同感である。四町野村の名主、会田太郎兵衛屋敷跡のすぐ近くには「越ヶ谷」の郷名を山号に取り入れている越ヶ谷山神宮寺迎摂院がある。越ヶ谷郷の総鎮守越ヶ谷の久伊豆社や越ヶ谷の中町の鎮守浅間社の別当寺として管理していた寺院である。江戸時代以前の四町野村あたりは、越ヶ谷郷の中心をなしていたと推測できる。私見ではあるが、古志賀谷氏の館は、自然堤防が特に発達している元荒川沿いの迎摂院を中心に会田太郎兵衛敷にかけてあったのではないかと推測する。なぜなら周辺には押切の地藏院と天満宮、野尻の薬王寺、御縄先の疣稻荷、弘誓寺、十王堂、三蔵院、その西隣の神明下村（現・神明町）には神明宮、最勝院（明治の廃仏毀釈で廃寺）、清光坊、政重院などがあり、神社仏閣が集中しているからである。神明宮は神明橋の袂にあつて近郷近在には見られぬ程立派な社であったといわれている。

一方、越ヶ谷郷の総鎮守である越ヶ谷の久伊豆社の地域は江戸時代以前は四町野村と陸続きで四町野村に属していた。その久伊豆社の神主を明治になるまで兼ねていたのが迎摂院の住職であった。迎摂院と久伊豆社は一体であったのである。「久伊豆社は大昔に迎摂院の隣りにあった」との地元の言い伝えは興味が引く（染谷隼生氏）。なお現在の御殿町に江戸時代になって越ヶ谷御殿ができ、その西側の新開地に「越ヶ谷郷」の名称から名付けられた越ヶ谷宿が誕生すると、日光街道も通り、六斎市でも賑いをみせ、江戸との交流を通して越ヶ谷宿が四町野村に代る近郷の中心となって繁栄していくのである。

② 大相模氏

鎌倉時代の大相模氏も古志賀谷氏と同様に箕勾氏から分かれ、大相模二郎能高が初めて大相模郷（注2）に進出している。現在の大相模地区の西部、西方・東方・見田方の地域である。その時期は古志賀谷二郎為基（十三世紀か）よりも早い時期（十二世紀か）である。

大相模郷の中心となる大相模氏の館は、かつては広大な敷地の周囲に構え堀と土塁がめぐらされていた中村頼司氏の地（大成町二丁目三三二の一）と推定されている。頼司氏は初代能高から数えて二十七代目にあたるという。享保十五年（一七三〇）に大相模姓を中村と改称している。

③ その他の周辺の豪族

綾瀬川と元荒川に挟まれた地域は、久伊豆社を氏神とする野与党一族が支配する所であり、大相模氏や古志賀谷氏の他に、岩槻の箕勾氏や渋江氏、八潮の八条氏などもみられた。

また、それ以外の地域としては越ヶ谷市の新方地区には新方氏、春日部市粕壁には春日部氏が見られた。